

Hi-STANDARD 第18回 CD ショップ大賞 大賞(赤)受賞に寄せて (コメント動画より全文掲載)

—大賞(赤) 受賞の感想をお聞かせください

横山健

「もう、嬉しい、嬉しいです。ショップで働いている皆さんが選んでくださったということで。現場の声っていうのは、なんていうかな、特別なものだと思うので、すごい光栄です。嬉しいです。ありがとうございます。」

難波章浩

「作品に対して、セールスがどうであったとか、数的なところでいうと、評価がどうであったとかあるんだけど。表*を見させてもらったんだけど、この期間リリースされた人たちの名前というか、もう僕らが知っているような、もうみんなそうそうたるメンツだったんですよ。その中で僕らのこの作品を、みんながいいんじゃないって言ってくれたのは、めちゃくちゃ勇気になったんですよ。正直、我々もこう久々のリリースだったし、実際本当になんというか、おっさんだし、そんな中でもう今をときめくもう現役バリバリの最先端にいる彼らの中に我々も入ってってどうなるのかな、どういう風に受け止められるんだらうっていう不安は実はあったのよ。

そんな中、やっぱりちょっとすごい今回の出来事は自分たちにとって、勇気もらったっす。はい、ありがとうございます。」 (*表: 2026年1月に発表になった入賞作品(赤)のリスト)

ZAX

「ありがとうございます。」

—CD ショップ店員へのメッセージをいただけますでしょうか？

横山健

「CD ショップはやっぱり、そのフィジカルな CD とかの発信基地として元気でいてもらいたい。そこで行ったら最初に聴けるとか、そういうものをすごくバンドとしても重要視しているんで、そんな気持ちでした。」

難波章浩

「音を求めて足を運ぶって行為はもうしなくなってきてるわけで。そこでやっぱり、レコード屋さん、CD ショップってところに行ってもらって、それをこう扱ってくれてる人たちに、これだけ評価してもらったらすごい嬉しい、とんでもない。俺たちほんと気持ち込めて作ったから、ほんとそれが届いたようで嬉しいです。」

—店頭 POP 展開やコメントなどご覧いただけましたでしょうか

横山健

「熱量が高くてね、嬉しいね。」

難波章浩

「あれ感動するんだよね。ほんと、気持ち込めて作ってくれているのがわかるんで、ほんといつもありがとうございます。」

横山健

「あれ、いっつも街出ていろんなお店入っていろんなプロダクツを見てるけど、結構 CD ショップの店頭のあの熱量って特別だと思うんですよ。もはやあれ、新しいジャンルと言っても。」

難波章浩

「そうだねえ。全部見たいぐらいだね。全部こう、写真撮ってみたいぐらいだね。」

横山健

「うん。新しいジャンル、新しいカルチャー、うん。なんか、あのミュージシャンは多分みんな嬉しいと思うので、当然僕らも嬉しかった。この先どうなっていくかわからないけど、本当に嬉しかったですよ。」

難波章浩

「めっちゃめっちゃ勇気もらうんだよね。コメントがもう、最初のリアクションだから。」

横山健

「そう、そうなんだよね」

難波章浩

「おお、そんないいのって思う。」

横山健

「リスナーに渡る前の最初のリアクションだもんね。」

難波章浩

「ね、感想がさ。本当にもう細かく書いてあって感動するんだよね。」

横山健

「逆言うと、君らの一言で売れる売れない、結構、左右するところ出てくると思うので責任持ってくださいね。(笑)」

—Hi-STANDARD の皆様が思っていらっしやる CD (フィジカル作品) ならではの魅力をお聞かせください。

横山健

「僕はね、アートワークだとかプロダクツっていうこと、かな。それを自分でお金払って買って、手に入れるっていうことがその行為そのものに、意味も魅力もある気がするな。もちろんサブスクだとか、パソコンで聴く音楽をもはや否定できる時代ではないんだけど、

何か明快な差はあると思うな。魅力と意味が。」

—CD ショップの思い出やエピソードなどありましたらお聞かせください。

横山健

「タワレコで取っ組み合いの喧嘩したことあるなあ。変なお兄ちゃんと。(笑)」

ZAK

「僕はあの、めちゃくちゃ怒られるかもしれないですけど、自分が好きなバンドのやつを全面、面出ししたことあります。」

横山健

「万引きかと思ったよー、安心したよー(笑)。」

—今後の展望等お聞かせください。

難波章浩

「これからも CD を作っていきたいですし、それを届けるっていう意味では、健くんがやっている PIZZA OF DEATH RECORDS で、自分たちで届けてるっていう気持ちでやってるんです。」

横山健

「そうね、今、ナンちゃんが話してて思ったんだけど、もう CD ってなかなか売れる時代じゃなくて。音源に価値をつけて販売するっていうのは。もちろん、世の中の価値観なんてすごく変わるから、僕たちにすごく意味があると、すごく魅力があると思ってやっていたことも、世の中の人たちがこれは手間だと、これは不経済だと思ったら、それは淘汰されていってしかるべきものだと理解してるんだけども。」

僕がやっぱり PIZZA OF DEATH RECORDS を原盤制作ってことを畳まないのは、やっぱり夢とか魅力とかがあるからで。きっと CD ショップで働いている方もそうだと思うんですよね。別業種だっていいわけじゃないですか。でも、音楽を売って CD を売っていきたいっていうのは、きっとそういう人たちの集まりだと思うんです。

繰り返しになっちゃうけど、いろいろ価値観が変わる世の中で、僕ら、もしかしたらもう必要ないのかなと思いがちだけど、ここは大きくまだまだ魅力がある。これにしかない魅力がある世界なので、腐らずいきましょう。」

難波章浩

「いいねえ。」